

鈴木彰・林匡編 アジア遊学 190

『島津重豪と薩摩の学問・文化』

丹羽 みさと

博物大名といわれた島津重豪（一七四五―一八三三）は、薩摩藩第八代藩主にして第十一代将軍家斉の岳父である。本書は、重豪の興味の射程を見定めること、薩摩を基盤とした学問や文化について把握することを目的としている。全体は「薩摩の学問」「重豪をとりまく人々」「薩摩の文化環境」「薩摩と琉球・江戸・東アジア」の四章からなる。また各論の内容や意義については、鈴木彰氏の「序言」にまとめられている。ただし、論述は執筆者の関心に委ねられており、各章の枠組みを越えて、相互に補充し合っている。

そこで、連続した個々の関心を軸に本書の章立てとは異なる順序で各論を紹介していきたい。

まず重豪研究の手引きとなる論考に、新福大健「島津重豪関係資料とその所蔵先」

がある。島津重豪関係資料について、その主な資料と所蔵先が記されている。

新福論文に挙げられた資料などを用いながら重豪の異国への関心を論じたものが高津孝「蘭癖大名重豪と博物学」である。シ―ポルトとの交流や、薩摩近郊の植物について中国人と問答した『質問本草』の出版など、重豪の旺盛な興味が示されている。

『質問本草』の著者が琉球人である理由と琉球人の文化的立ち位置については、木村淳也「島津重豪の時代と琉球・琉球人」に詳しい。薩摩の支配下に置かれた琉球では、政務を円滑に運ぶため、和歌や和文学などの文芸を吸収していったことが記されている。大和の文芸は高度な水準を誇ったものの、薩摩人にとって琉球は異国であるという覆しがたい認識が存在したことを示す。

木村論文にある琉球の和歌という観点を、さらに掘り下げたものが銚武彦「和歌における琉球と薩摩の交流」である。琉球における和歌受容から、多地域との交流を描き出している。先の二論文と異なり、むしろ

積極的に異国性を受け容れていったとするのが、渡辺美季「島津重豪と久米村人―琉球の「中国」である。福建からの渡来人

を祖に持ち、中国文化を取得していく久米村の琉球士族に焦点が当てられている。重豪が憧憬する中国の体現者であろうとしたことが、薩琉関係における琉球の存在意義を堅固なものとしていたと指摘する。

重豪の出版と学問に焦点を当てているのが、丹羽謙治「島津重豪の出版―『成形図説』版本再考」である。重豪の出版事業、特に博物の書『成形図説』について書誌学的な観点から論じ、またこれを架蔵していた老中松平定信が政事の項目に分類していたことを指摘したものである。丹羽論文では、重豪が儒者の詩集や文集の出版助成も行っていたが、それは藩内から著名な儒者が出ていない焦燥感に起因すると指摘しているが、それを補完するのが、永山修一「学者たちの交流」である。重豪時代の儒学者の活動や、国学者などを取り上げ、藩内の教育について触れられている。

薩摩藩と源頼朝に関わる連鎖も見られる。源頼朝を筆頭とする島津家の由緒を、薩摩藩がどのように編纂し、どのようにその正当性を主張してきたのかについて重豪の活動、特に修史編纂事業から論じられたも

のが林匡「重豪と修史事業」である。岸本寛「近世薩摩藩祖廟と島津重豪」は鎌倉の忠久と頼朝の墓所に注目し、重豪がそれらを創出したのは、幕府での地位を不動のものとするためだと指摘する。また、栗林文夫「島津重豪の信仰と宗教政策」も重豪の信仰から、頼朝・忠久および祖先の祭祀祭礼に言及し、その具体的様相を記している。祖先を重んじていた重豪は、生前、自らも顕彰されることを希望していたと、石碑や出版物などから分析していったのが、岩川拓夫「近世・近代における島津重豪の顕彰」である。

重豪が頼朝への意識を高揚させていった理由の一つに、徳川將軍家との婚姻があるが、これら島津家の縁戚関係について述べられているのが松尾千歳「広大院―島津家の婚姻政策」である。重豪が政治工作の末、將軍の岳父となったという俗説を覆しながら論じられている。また、崎山健文「島津重豪従三位昇進にみる島津齊宣と御台所茂姫」では、同じく將軍の岳父という立場をふまえて、重豪の叙位について論じられている。極秘文書から、昇進までの様相を丹念に追っている。

この他、薩摩を代表する怪異譚『大石平六夢物語』を扱った二論文がある。一つは内倉昭文「重豪の時代と「鹿児島三大行事」であり、鹿児島三大行事のひとつ、赤穂浪士を偲ぶ「義臣伝輪説会」が、同物語に大石内蔵助が登場する契機となった可能性を示唆している。また、宮腰直人「大石兵六夢物語」小考―島津重豪の時代と物語草子・絵巻」では、それ以前に成立した『大石兵六物語絵巻』と比較しながら、徐々に薩摩に根ざした言説が物語に採用されるに從い、大石内蔵助と関連付けられていくことを指摘している。

言語に注目したものが駒走昭二「薩摩ことは―通セサル言語」である。近世中期の薩摩言葉が再構できるゴンザ資料をもとに、薩摩言葉の「通じにくさ」について、語句、文法、音韻から分析したものである。つまりは言葉のリズムが他国と異なるために生じた特異性であったことを提示した論文であり、謎解きの高揚感も味わうことができる。

最後に、薩摩の外に基軸を移した論文を紹介したい。鈴木彰「島津重豪・薩摩藩と江戸の情報網―松浦静山『甲子夜話』を窓

として」である。江戸在の松浦静山の隨筆から、大名や侍臣、医師や画人などの言葉を拾い集め、地位のある豪気な武家といった重豪の姿や彼の情報網を浮かび上げられている。

以上のように、十七ある論文はそれぞれに魅力があり、島津重豪と薩摩について興味を抱ききっかけを十分に含んだものである。また既に重豪や薩摩に関する研究を進めている読者にとっては、欠くべからざる論文集となる。是非、本書を繙き、新たな関心への扉を開かれない。

(二〇一五年十月 勉誠出版 A5判 二

二四頁 二四〇〇円)

(にわみさと 本学兼任講師)

日下力監修
鈴木彰・三澤裕子編

『いくさと物語の中世』

大貫 真実

本書は、いくさ・戦争が身近であった中世社会における「いくさと物語」と人間の関わりかたの歴史」に迫った論文集である。

いわゆる軍記物語だけではなく、あらゆる中世の文学や芸能を、人といくさの関わりかたという観点から見つめ直すことに主眼が置かれている。以下、第一章から順に、各章に収められた論文の内容を大まかに紹介していきたい。

第一章「十三世紀——歴史・宗教・権力との交差——」には、計六編の論文が収められている。佐伯真一氏は、『平家物語』の作品分析を通して、「鎮魂」という概念の多様な性格に迫る。野中哲照氏は、前九年合戦を対象として、一つの合戦に対する認識が、勝者である政権の管理下で変容していく過程について論じる。平田英夫氏は、戦乱の世と対峙する後鳥羽院について、和歌という観点から考察する。松本真輔氏は、

武人としての聖徳太子の姿に着目し、仏教と殺生の問題に聖徳太子伝の語り手たちがどのように向き合ったのかを論じる。牧野淳司氏は、弁暁の唱導における後白河院の位置づけ、さらに延慶本『平家物語』の後白河院をめぐる叙述との結びつきを指摘する。鈴木彰氏は、蒙古襲来後の社会で醸成された規範意識や価値観と、それらが生成過程の軍記物語に及ぼした作用について考察する。

第二章「十四世紀——受容と観念化の道程——」は、計四編の論文から成る。大津雄一氏は、暴力によって夫を失くした女性たちのその後の生き方・死に方について、小宰相と曾我兄弟の母の特異性に着目して論じる。櫻井陽子氏は、以仁王の描写の分析を通して、現存する延慶本『平家物語』が持つ意義について検討する。和田琢磨氏は、『太平記』と『明德記』を中心に、立場や状況に応じて異なっていた守護大名たちの軍記観について論じる。田中尚子氏は、『太平記』と『三国志演義』で引用される中国故事を持つ機能について分析し、二作品間で共有されたイメージが、後の作品にまで影響を及ぼしていることを指摘する。

第三章「十五世紀——芸能・学問・武家故実をめぐる動態——」には、全章の中で最多の計七編の論文が収められている。日下力氏は、戦いの伝承の劇化について、古代アテナイの詩人・エウリーピデースと世阿弥との比較を通して論じる。清水眞澄氏は、『蔭涼軒目録』の記事から、琵琶法師と他の芸能との関わりを考察する。源健一郎氏は、『臥雲日件録抜尤』に焦点を当て、様々な情報や知識が琵琶法師の語りを通して禅僧へ提供されていたことを指摘する。佐倉由泰氏は、十五・十六世紀を「類書の漢学の最盛期」とし、真名表記の軍記物語である『大塔物語』を「日本式の漢学」という観点から捉え直している。小助川元太氏は、十五世紀半ば以降の百科事典的な特徴を有する物語について、「武士の教養」という観点から考察する。齋藤真麻理氏は、『鴉鷲合戦物語』の特異性を作中の書状や文書から見出し、戦乱の世を生きた知識人たちの文学的営為について述べる。榊原千鶴氏は、戦乱の後、礼法の確立を以て秩序の再興に挑んだ日野富子を中心に、武家の女性の政治参画について論じる。

第四章「十六世紀——記憶と文物の編成

——」は、計五編の論文から成る。森田貴之氏は、『太平記』の諸本研究史への今川家本の位置づけを検討し、戦国大名たちによる書写活動の様相に言及する。小秋元段氏は、江戸時代に刊本として流布した『吾妻鏡』について、主に整版本にまつわる問題に焦点を当てて考察する。樋口大祐氏は、信長と秀吉による播磨攻略戦を対象とし、統一戦争の「死者の記憶の語られ方」と、敗者となった人々の秀吉をめぐる言説との関わり方を論じる。三澤裕子氏は、幸若舞曲で語られるいくさについて、国内での「実在のいくさ」と海上での「架空のいくさ」という二つの観点から検討する。武田昌憲氏は、島原一揆の鎮圧をめぐる動向について、諸藩から派遣された「使者」に着目して考察する。

最終章の第五章「十七世紀——再解釈と定着の諸相——」には、計五編の論文が収められている。出口久徳氏は、版本『平家物語』の挿絵について分析し、武家による安定した治世という社会背景との関連を指摘する。田口寛氏は、豊臣秀吉の阿弥陀寺当座歌会にまつわる諸文献を、「戦国期の回顧と歴史的編成」という観点から検討す

る。橋本正俊氏は、十七世紀の文芸の中でも金平浄瑠璃と通俗軍記に着目し、源氏の系譜が地域の伝承とも絡み合いながら再編成されていったことを指摘する。岩城賢太郎氏は、中期の源氏をめぐる作品との比較を通し、浄瑠璃『源氏烏帽子折』に表れた源氏再興譚の特色について考察する。倉員正江氏は、軍書との影響関係をはじめ、仮名草子『伽婢子』が後続の諸作品に与えた影響について論じる。

以上、各論文の要旨を述べてきた。本書は十三世紀から十七世紀まで一世紀ごとに章立てがなされ、それぞれの章題に付された副題は、その時代の特色を表したものとなっている。ただし、「刊行の趣旨」で述べられているように、後の時代との連続性を考慮して排列された論文もある。本書を通読することで、日本の中世社会における「いくさと物語と人間の関わりかたの歴史」を通史的に把握することができるだろう。

「戦後七十年論集」。本書はこのような企画のもとに編まれた論文集であるとのことである。中世という時代に限らず、いくさ・戦争と人間との関係性を考えるうえで

の多様な問題意識に触れることができる本書を、ぜひ多くの方に手に取っていただきたい。

(二〇一五年八月十五日 汲古書院 A5
判 六四〇頁 本体一五、〇〇〇円)

(おおぬきまみ 大学院前期課程在学生)

「書評」欄に関する規定と 献本のお願

「立教大学日本文学」は学会員の著作を広く紹介することを目的に、下記の原則にそって「書評」、「新刊紹介」欄を設けています。

- 一、「書評」「新刊紹介」については、著作の一冊を立教大学日文学会に献本いただいたものを対象とする。
- 一、献本いただいた著作については、原則として「書評」または「新刊紹介」を掲載する。
- 一、「書評」(執筆は非学会員も含めた有識者)、「新刊紹介」(執筆は大学院生または本学教員)の区別については、編集委員会が適宜判断する。